

平成二十九年歌会始御製御歌及び詠進歌

野

御製

邯鄲かんとんの鳴く音聞ねかむと那須の野つどに集よるひし夜をなつかしみ思ふ

皇后陛下御歌

土筆つくし摘み野蒜のびるを引きてさながらに野にあるごとくここに住み来こし

皇太子殿下

岩かげにしたたり落つる山の水大河となりて野を流れゆく

皇太子妃殿下

那須の野を親子みたり三人で歩みつつ吾子あこに教をしふる秋の花の名

文仁親王殿下

山腹さんぶくの野に放たれし野鷄やけいらは新たな暮らしを求め飛び行く

文仁親王妃紀子殿下

霧の立つ野辺山のべやまのあさ高原の野菜畑いそに人ら勤いそしむ

眞子内親王殿下

野間馬のまうまの小さき姿愛らしく蜜柑みかん運びし歴史を思ふ

佳子内親王殿下

春の野にしろつめ草を摘みながら友と作りし花の冠

正仁親王妃華子殿下

野を越えて山道のぼり見はるかす那須野ヶ原に霞たなびく

御製
邯鄲の鳴く音聞かむと那須の野に集ひし夜をなつかしみ思ふ

天皇皇后両陛下は、夏の時期、那須御用邸で数日間をお過ごしになります。那須御用邸では、陛下のご意向を受け、平成九年以降、計十年間にわたって、栃木県立博物館が中心となり敷地内の動植物相調査が行われ、報告書にとりまとめられました。この御製は、嚶鳴亭近くで、夜間、研究者から説明をお聞きになり、邯鄲の声をお聞きになったときのことを思い起こされてお詠みになったものです。

皇后陛下御歌

土筆摘み野蒜を引きてさながらに野にあるごとくここに住み来し

天皇皇后両陛下のお住まいである御所のお庭には様々な野草が生育しており、両陛下は、ときに職員もお誘いになり、春のつくし摘み、秋のギンナン拾い等、季節々の自然を楽しみつつお過ごしになっていらっしゃいました。この御歌は、都心の御所に住まわれながら、あたかも野に住むように過ごして来られたこれまでの御所でのご生活を感慨深く振り返り、お詠みになっ

皇太子殿下

岩かげにしたたり落つる山の水大河となりて野を流れゆく

皇太子殿下には、平成二十年五月に山梨県甲州市の笠取山かさとりに登られ、東京都水道水源林を御視察になりました。このお歌は、その折に、多摩川源流となる、岩から滴り落ちる一滴一滴の水とその先の小さな水の流れを御覧になり、その流れゆく先に思いを馳せられてお詠みになったものです。

皇太子妃殿下

那須の野を親子三人みたりで歩みつつ吾子あこに教ふる秋の花の名

皇太子同妃両殿下には、夏に那須御用邸に御滞在の際には、御用地内の御散策を折々にお楽しみになられています。昨年の夏には、中学三年生になられた愛子内親王殿下を伴われての御散策の機会が多くございました。このお歌は、御用地内の翁が丘を三殿下でお歩きになりながら、そこに咲く、松虫草まつむしそう、女郎花おみなえし、梅鉢草うめばちそうなどの秋の草花を内親王殿下にお教えになった時の喜びをお詠みになったものです。

文仁親王殿下

山腹さんぷくの野のに放たれし野鷄やけいらは新たな暮らしを求め飛び行く

秋篠宮殿下は、平成十五年の八月に、ご家族でタイのカオヤイ国立公園をご訪問になりました。その折に、農業・協同組合省立森林局より放鳥をしてほしいとの依頼を受けられました。ブリーディング・センターで繁殖をした赤色野鷄でしたが、山の中腹で放鳥が行われました。勢いよく飛び立っていく野鷄が新たな環境でどのように暮らし、何処どこを住処すみかにするのかにご関心があり、その時に思われたことをこのお歌にお詠みになりました。

文仁親王妃紀子殿下

霧のの立つ野辺山のべやまのあさ高原の野菜畑いそに人ら勤しむ

秋篠宮妃殿下は、ご家族で夏の野辺山高原（長野県）を訪れられる機会がありました。野辺山では、冷涼な気候を活かしてたくさんの高原野菜が生産されています。すがすがしい夏の高原に霧が立つ早朝から、一面に広がる野菜畑で作業いそに勤しむ人々の姿を、このお歌にお詠みになりました。

野間馬のまうまの小さき姿愛らしく蜜柑みかん運びし歴史を思ふ

眞子内親王殿下

眞子内親王殿下が初めてお一人で行事にご出席になったのは、平成二十年四月、恩賜上野動物園の「子ども動物園開園六十周年記念・野間馬贈呈式」でした。野間馬は、主に愛媛県今治市で飼育されている、日本在来種の小型の馬です。体は小さいけれども力持ちで、昔は重い蜜柑みかんの箱などを運んでいたという話をお聞きになり、驚かれるとともに、目の前の可愛らしい馬かわいが荷物を運ぶ姿を想像されて健気けなげに思われたことを、このお歌にお詠みになりました。

佳子内親王殿下

春の野にしろつめ草を摘みながら友と作りし花の冠

佳子内親王殿下は、小学生の頃のある春に、ご友人とご一緒にお庭でシロツメクサの花を摘まれ、冠を編まれて、遊ばれたことがあります。ご友人と楽しくお過ごしになった時間を懐かしく思い出され、このお歌をお詠みになりました。

正仁親王妃華子殿下

野を越えて山道のぼり見はるかす那須野ヶ原に霞たなびく

葦茂る野に咲きのぼる沢桔梗冴えたる碧あをに今年も逢へり
召人 久保田淳

選者 篠 弘

書くためにすべての資料揃ふるが慣ひとなりしきまじめ野郎

選者 三枝昂之

さざなみの関東平野よみがへり水張田みはりだを風わたりゆくなり

選者 永田和宏

野に折りて挿されし花よ吾亦紅われもかうあの頃われの待たれてありき

選者 今野寿美

月夜野つきよのの工房に立ちひとの吹くびーどろはいま炎ひにほかならず

選者 内藤 明

放たれて朝遥あしたけき野を駆けるふるさと持たぬわが内の馬

選 歌 (詠進者生年月日順)

岐阜県 政井繁之

如月きさらぎの日はかげりつつ吹雪く野に山さんちゆう中和紙かうぞの楮かをさらす

東京都 上田国博

歩みゆく秋あきひ日ゆたけき武蔵野あさぎに浅黄斑蝶まだらの旅を見送る

長野県 小松美佐子

宇宙より帰る人待つ広野には引力といふ地球のちから

千葉県 齋藤和子

筆先に小さな春をひそませてふつくら画ゑがく里の野山を

東京都 平田恭信

手術野しゆじゆつやをおほふ布地は碧あをみ帯び無菌操作の舞台整ふ

東京都 西出和代

父が十野菜の名前言へるまで医師はカルテを書く手とめたり

宮城県 角田正雄

積み上げし瓦礫の丘に草むして一雨ごとに野に還りゆく

新潟県 山本英史子

友の手をとりてマニキュア塗る時に越後平野に降る雪静か

東京都 鴨下 彩

野原ならまつすぐ走つてゆけるのに満員電車で見つけた背中

新潟県 杉本陽香里

夏野菜今しか出せない色がある僕には出せない茄子の紫

佳 作 (詠進者生年月日順)

秋田県 浦部昭二

わが植ゑし杉の林へ鉦なたさげて村のはづれの野道を通る

宮城県 赤崎敏子

直土ひたつちに蒔むしろかさねて小豆乾す野中の家の庭のひだまり

和歌山県 山田千代子

みぎ熊野ひだり高野かうやのみちしるべ春陽はるひななめに文字深くせり

青森県 三戸源治

畦道に野火を放てば亡き父の錆びたる煙管キセルの今に出で来ぬ

山口県 吉國 建

銀幕を裏から見てゐた映画祭野外の立ち見に君が居た夏

静岡県 後藤悦良

「戦友」の歌に覚えし言葉にて野末は今もさびしきひびき

京都府 高橋かつみ

そのかみの野うさぎ駆けぬしふるさは菟道とよばれて宇治となりたり

群馬県 岸 和夫

家中が桑食む蚕の音の海野球用具は縁側の隅

大分県 長野幸一

週末の老々介護の身仕度に野良着忘れずカバンに入れる

愛知県 家田 操

自転車をリハビリ室にこぎながら花野への道とこころ遊ばす

茨城県 岩熊啓子

そここの雑木林を山と呼ぶたひらな野なり関東平野

新潟県 相澤初美

天空の野に人の声響き合ひ山古志棚田稲の香が満つ

埼玉県 橋本久子

ザックより茶道具出して野点せり山男にも新茶のかをり

山梨県 入倉久美子

野に住まふはずの狸がいつしらにひとり住まひの老父と住みゐる

香川県 上久保忠彦

野仏に今日を頼みて黙礼す行商の道山あひに入る

石川県 北西佐和子

家持の燈ぬらしし雪解水たたへて川は春の野はしる

岐阜県 江尻恵子

聞こえない二つの耳に野の風は頬を打ちつつ音を教へる

石川県 上農多慶美

五年経て津波のあとのふるさとの野に学び舎ヤの建つ日決まれり

愛知県 松浦晴男

「野に出でよ」たらちねの母の声聞こゆ夏かぜ三日まどろみの朝

東京都 高橋嘉恵

子を叱り野太くなりゆく吾が声に山鳩ぼうぼうぼうと応ふ

新潟県 安達亮太

スタートの「オンユアマーク」を聞けばもう前頭前野は走り出してる